

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館1F-6(漆工)に展示されている「黒漆楼閣人物螺鈿食籠」について勉強してみよう。

きらきら光る貝でかざった 重箱のお話



図1 黒漆楼閣人物螺鈿食籠

中国 元時代 14世紀 個人蔵

みなさんは、海辺で貝がらを拾ったことがありますか？貝がらの内側はすべすべしていますね。種類によっては、そのすべすべした部分が虹色にかがやくものがあります。上等なおすし屋さんでみかけるアワビや、南の島でよく食べるヤコウガイなどがその代表です。このきらきらがやく部分をかざりに使った工芸品「螺鈿」が今回の主役です。

貝のかがやきを利用した工芸品は、世界各地にあります。中国、朝鮮、琉球（沖縄の昔の名前です）、日本などの東アジアでは、螺鈿が漆工芸とともに発達しました。漆工芸とは、漆の木からとれる樹液を器の表面にぬって、コーティングしたり、接着剤として使ったりする工芸です。螺鈿といっしょに使うときは、貝のかがやきが引き立つように、漆に黒い色をつけるのがふつうでした。

中国の螺鈿は、たいへん古くから作られてきました。元時代の（西暦1271年～1368年）の螺

鈿が有名です。

元時代の螺鈿は、うすくけずった貝を、文様の形に切って器に貼ったり、細かくきざんで文様の形にならべたりします。器の表面に貝をはったら、その貝がすっかり見えなくなるまで黒漆をぬり、そのあとで貝の上にぬった漆を刃ものでペリペリとはがします。これはとても手間のかかる仕事です。絵の周りには、小さな円、六角形、ひし形、花形、格子などを描いて地文様（背景の文様）としました。地文様というかわき役のようですが、同じ形をくり返す文様は、少しでもずれると、とても気になります。これがきちんとできていないと、全体の印象がすっかり変わってしまうので、とても重要なかざりなのです。

写真の作品（図1）は、元時代のものと考えられている、食べ物を入れる器です。花びらが8まいある花のような形の器が4だん重なって、いちばん上にふたをしています。

